

薬学校の設立

私立から市立へ

『富山大学五十年史』（編集／富山大学年史編纂委員会、平成14年）によると、富山における公的薬学教育のスタートは、明治11年（1878年）に、富山市総曲輪（現在の市民プラザの場所）にあった石川県富山病院の医学所（富山医学所）に設けられた薬舗学の一課であったという（明治9年に越中一國は、石川県に編入されていたため、石川県^がとなっている）。

ちなみに、明治22年（1889年）3月に「薬品営業・薬品取扱規則」が公布され、「薬剤師」の職名が生まれている。

薬学校の廃校を決議してしまう。その後、校長や職員、市内業者関係有志は、薬学校存立運動を強力に展開した。

3月30日の富山市会では、横江清次郎議員が緊急動議として「…：売薬を唯一の産物とする本市の信用上薬学校存立の必要ありと信ずる。組織方法を改め、更に発案あるんことを参事会に求めたい」と述べたことがきっかけとなり、4月21日の市会において、薬学校の存立が可決され、授業科目を簡略にした薬業学校（**富山市立薬業学校**）に変身することになった。なお、これにより、薬剤師の養成よりは、むしろ売薬業子弟の教育に重点を置く学校になった。

市立から県立へ

明治39年3月の市会では、市立

明治23年（1890年）8月、帝国大学医科大学教授・丹波敬三が来富し、「今後の信用保持には効能の著しい売薬を製出しなければならぬ：当市において目下の急務とする売薬の改良には薬剤師・薬学士を養成することである」という講演を行なった。

明治26年（1893年）5月、「**立富山薬学校**」の設立発起人会が開かれ、8月3日に私立薬学校設置の認可を得た。なお、この年の6月に、日本薬剤師会が設立されている。

共立富山薬学校の敷地は、富山市梅沢町の広貫堂の向側に用意された。創設経費は、富山市の補助金の他、広貫堂をはじめ多数の有志の寄付金によりまかなわれた。現在、その場所には、記念碑「富山薬学発祥の地」がある。これは、昭和40年（1965年）10月、富

薬業学校の規則改正が話題となり、売薬業者育成から薬剤師養成へと再転換を図り、県立移管を早急に実現しようという気運が起こった。

業界各方面での建議、陳情もあり、県会において、40年度からの県立移管（**富山県立薬業学校**の発足）が決議された。

明治41年12月3日の県会で、富山市総曲輪の日赤富山支部病院跡地に県立薬業学校の建設を可決。県会最終日の12月14日、宇佐美勝夫知事より「富山県立薬業学校を明治43年度においてその程度を高め、専門学校令による薬学専門学校にその組織を変更せんとす」との諮問案が提出され、満場一致で可決された。

県立の専門学校へ

明治42年（1909年）7月、

山大学薬学部創立75周年を記念して建立されたもので、奥田に所在した旧富山薬学校の門柱の一つを用いたという。

共立富山薬学校は、明治27年2月1日に開校したものの、生徒の退学が相次ぎ、入学生も少なくな、学校の維持も危ぶまれることになった。そこで、薬業界有志は、市会議員を中心に市立移管運動を展開。明治30年11月1日に新生の**富山市立薬学校**が発足した。

ところが、明治32年（1899年）8月12日の未明、市内中野町で出火があり、強い南風の影響で、薬学校も類焼。9月11日からかうじて形ばかりの授業を始めたが、明治33年3月16日、富山市議会が教育費査定中に、「…：就学生徒が少なく義務教育でもない薬学校の経営はもろろん、校舎の新築は市の予算の及ばないところ」として、

文部省（当時）は、専門学校令による県立の薬学専門学校を富山市に設置し、翌年4月からの開校を認可すると告示。**富山県立薬学専門学校**の最初の入学式が山王町の仮校舎で行なわれた。明治43年（1910年）11月下旬、日赤富山支部病院跡地には、校舎が竣工。敷地は2892坪余、建物は558坪余であった。同年12月4日、日本薬学会会頭・東京帝国大学教授、長井長義^{ながよし}博士を迎えて開校記念式が挙行された。

大正5年4月、日本薬学会の第36回総会が、会頭の長井長義博士および丹波敬三博士を迎えて開催された。日本薬学会の地方での開催は、大阪、九州に次ぐものであったという。この時、長井博士は、富山における伝統的薬業の高度化、技術革新を期待され、県立から官立への移管、さらには薬学大学へ

の累進に向かつて努力を積み重ねるよう励まされたという。これを受け、富山県官民あげての官立移管運動が続けられ、長井長義博士の強力な支援もあり、大正6年に官立移管が決定された。

官立の専門学校へ

大正9年（1920年）12月1日付で、富山県立薬学専門学校の官立移管が公布され、奥田村において**官立富山薬学専門学校**の新校舎の建設工事が始まった。大正10年4月には奥田の新校舎で授業が開始。敷地は、昭和14年（1939年）頃の記録で、2万5875坪という広大なものであった。

ところが、昭和20年8月2日未明のアメリカのB29爆撃機による空襲で、校舎は薬品庫と書庫を除き焼失。昭和21年2月、復興期成

同盟会が結成され、復興資金を集める活動が開始された。教官各位はもちろん、学生までがそれぞれの立場で涙ぐましい努力を重ねたという。募金は二期にわたり、計400万円。その中には富山化学工業(株)社長・中井敏雄氏（富山薬専10回卒）が私費40万円を投じ、1棟をまず建設。これにより、早くも昭和22年には奥田の新校舎に復帰することができたという。

専門学校から大学へ

昭和24年（1949年）、官立富山薬学専門学校は、国立学校設置法により**国立富山大学**に統合包括され、同大学の薬学部となった。その後、富山大学の五福集中計画により、薬学部の五福地区へ移転が決定され、校舎の移転が行なわれた。奥田キャンパス跡地は、住

宅地に変身したが、奥田寿町公園（旧校舎温室付近）の南西端には昭和57年、同窓会有志により記念石碑が建立された。

その後、政府の無医大県解消の流れがあり、医学部設置に向けて県と大学側で話し合われたが、合意に至らず、県側は単科の医科大学構想で独自に文部省に働きかけた。しかし、先行する他県もあり、余程特色ある構想でないと言示されないという文部省の意向が示され、富山大学の薬学部と合わせた医科薬科大学構想に拍車がかかり、昭和50年に**富山医科薬科大学**が設置された。

そして、2005年、富山医科薬科大学は、旧富山大学、高岡短期大学と統合し、**富山大学**となった。共立富山薬学学校からの薬学部の歴史は、現在の富山大学薬学部を引き継がれているのだ。⁶⁶